不動産学の魅力

明海大学 不動産学部

第103回

渡辺 泰冴
不動産学部
4年

白川郷の「レスポンシブルツーリズム」

住民と観光客が築く持続可能な未来

世界文化遺産に登録されている岐阜県・白川郷。合掌造り集落の景観を求め、年間を通じて多くの観光客が訪れる。その観光のあり方が「レスポンシブルツーリズム」という視点から注目されている。レスポンシブルツーリズムとは、観光客と地域住民が互いに影響し合い、観光が単なる消費に留まらず、地域の保存や発展につながる観光の形を指す。

白川郷では、観光客の「美しい」「残したい」といった声が、住民の保存活動への誇りや意欲を高めてきた。合掌造りの維持は労力がかかるが、来訪者の反応が地域の原動力となっている。また、農作業や民宿での宿泊体験など、住民と観光客が交流する取り組みも広がる。訪問者は単なる見物客ではなく、文化を「支える参加者」として地域に関わることができる。住民にとっても収入源の拡大だけでなく、伝統や暮らしを伝える場として意義を持つ。

一方で、課題も浮かび上がる。観光客の急増による交通渋滞や生活環境への影響、自然環境の負荷などは深刻だ。住民の暮らしの静けさを守りつつ観光を継続するには、来訪者の節度ある行動と、持続可能性を意識した仕組みづくりが不可欠となる。

そこで白川郷では、来訪者の節度ある行動を促し、住民の暮らしと観光の両立を図るために、具体的に5つの実践をしている。指定の駐車場を利用すること、集落内での火の取り扱いは厳禁とすること、ごみは各自で持ち帰ること、夜の観光は受け入れないこと、集落内でのドローン飛行は禁止すること、といった内容である。

このように、白川郷の観光マナー対策を立てて、来訪者に周知しているのである。

また、集落の維持にはその担い手が欠かせない。しかしながら、戦後の急激な経済発展によって、農村の生活状態も著しく変化し、都市への人口流出による過疎化が進み、更に高齢化も深刻である。白川郷ではこれまで、村の景観を壊さないために、合掌造り家屋を「売らない」「貸さない」「こわさない」の3原則を柱とする住民憲章をまとめてきた。しかし、「貸さない」のルールを緩和し、集落の魅力を移住者の受け入れができる状態にしている。

白川郷の事例は、世界遺産という枠を超え、観光客と住民が「応答」し合うことで地域を未来へつなげる可能性を示している。見る観光から、共につくり、守る観光へ。その歩みは今も続いている。

【教員コメント】

観光地が賑わいを取り戻す一方で住民の住みやすさが損なわれるオーバーツーリズム問題に対し自治体は協議体設置や計画策定等によりその抑止に取り組んでいる。白川村を含めた自治体には国も支援しており、地域の取り組みと成果が公表されている。

（西村愛）